

〈近代本論第十四回：軍艦外交と文明化イデオロギー〉

参考文献

- ※服部之総『黒船前後』岩波文庫
- ※マシュー・ペリー『日本遠征記』岩波文庫
- ※タウンゼント・ハリス『日本滞在記』
- ※ラザフォード・オールコック『大君の都——幕末日本滞在記』岩波文庫上中下
- ※アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』岩波文庫上下
- ※アルジャーノン・ミットフォード『英国外交官の見た幕末維新』講談社学術文庫
- ※ジョン・レディー・ブラック『ヤング・ジャパン』東洋文庫
- ※『幕末政治論集』岩波日本思想大系

一八五三年七月八日に浦賀沖に現れたマシュー・ペリー提督（一七九四～一八五八）の艦隊は、二隻の蒸気船フリゲート艦と二隻の帆船軍艦から成っていた。本格的な「黒船」の登場である。蒸気船そのものの原理は十八世紀末に発明されていたが、それを実用化したのはアメリカ人ロバート・フルトンのクラームント号（クレルモント号）の成功（一八〇七年）以来であるとされている。黒船という用語は鉄造船をイメージするが、服部之総によると、最初の鉄造戦艦はイギリスが一番速く、それはようやく一八六〇年のことだった（『黒船前後』）。ペリーの軍艦はしたがって木造であり、また蒸気船としても外輪式で「単式機関船時代」と呼ばれた、蒸気船実用化の第一期のものだった（同上）。しかしその衝撃は莫大だった。幕府閣老には「たった四杯で夜も寝られない」日々が到来することになる。

ペリーはこの日、四隻の艦隊で現れたが、元々はずっと大きな艦隊を指揮してくるはずだった。いくつかの軍艦の艀装が遅れたため、規模よりは速度を重視することになったのである。実際に半年後の本交渉の時には、六隻に増えた本格艦隊で登場する。これらはすべて、古典的とも言える、〈軍艦外交〉（**Gunboat Diplomacy**）の様式で行われた。外交というより実戦そのものであったが、蒸気軍艦の本格的使用は、イギリス海軍によるアヘン戦争（1840～42年）とアロー号事件（一八五六年）が最初期のそれであり、ペリーははっきりと前者を意識してこのスタイルを採用している。

上述の最初の本格蒸気船クラームント号は商船である。そして大失敗したらしいのだが、イギリスで造られた最初の鉄造船も、軍艦ではなく商船だった（服部之総、同上に拠る）。

つまり蒸気船の時代は、まず商業、貿易、交通ベースで始まり、それが「間髪を入れず」、軍用に応用されたことがわかる。この順序はやはり、この時代の国際状況、そして植民地主義や帝国主義を含めても、本質的ではないかと思う。まず貿易の大きな利権があり、それを護り促進するように同じ形式の最新造船技術が軍用に用いられるということ。したがって、この重合は、「提督」自身においても強く意識されることになる。つまり彼の自己意識の半ばは、「文明化の使徒」であると。したがって非・文明国に対する「自由度」ももちろん莫大になる。その前提は、「文明差」であり、端的に蒸気船軍艦の力だった。

〈日本政府に対して断固たる態度を執ることが提督（※ペリー）の方針だった。……なぜならば、この方針こそは、彼に託された微妙な使命に対する成功を保証してくれる、最善のものだと信じたからだった。彼は従来同じ使命を帯びて日本を訪問した他の人たちとは、まったく異なった方針を採ろうと決心したのであった。すなわち、一文明国が、他の文明国に対してとるべき儀礼的な態度を当然のこととして要求しようとしたのである。〉
（マシュー・ペリー『日本遠征記』、2-191p）

「文明国」は、普通、許可無く相手国の首都の沖合に軍艦で現れ、どんどん内海に侵入して勝手に湾の浅深を測量したりはしない。それはまったくの「威力偵察」であり、偶発時から戦闘が始まってもおかしくはなかった。ペリーはもちろんそれも「織り込み済み」である。

〈武力に訴えての上陸の問題は、事件の今後の発展によって決定されるものであった。これはもちろん、採られうる最後の手段であったし、また最後であることが望ましかった。しかし提督は、最悪の場合を予想して、艦隊に対して絶えず完全な準備をさせておき、戦争中とまったく同様に、乗組員を徹底的に訓練した。もし日本人が見識ぶってお高くとまっているならば、面白い勝負だった。けだし他の国民もまた誇りを有しているのであって、その誇りをいかに守るべきかを知っているということ、また日本人がわれわれよりも優越しているとは認めないということ、日本人に知らしめるのは結構なことであった。〉（同上）

この自己満足的ポーズ、ドイツ人なら、^{シャーデンフロイデ}〈お気の毒様〉と言うかもしれない、そういう悪意のこもった「上から目線」を忘れないようにしたい。それがまさに「文明化イデオロギー」の本質を露呈しているからである。その用意周到を見ると、ペリーはひょっとしてこの「偶発的事件」をかなり期待していたのではないかと思えるふしすらある。いささか想像力を働かせれば、もしここで小競り合いが起きていけば、攘夷も開国も吹き飛んで、日本はアヘン戦争時の中国とほとんど同じ状況に置かれていた可能性もある。なにしろこの戦争の「ぼろいもうけ」（品の悪い言葉で恐縮だが）がペリーたちの直接のモデル、動機となったことは間違いないところだからである。

これは歴史を無駄にドラマタイズしているわけではない。開国維新が全体としてうまくいったことを知っているわれわれは、逆にこうした現場での「どちらにころぶかまったく

わからない」危うさをどこかで捨象して、安心しまっているように感じるからである。したがって危うさは危うさとして思い出しておかねばならない。

もう一つ、似たような〈偶発事に期待した力の論理〉をあげておこう。ペリーよりははるかに穏和で、また交渉上手の外交官だったハリスは、日米通商交渉で、そうとうに強面のやりとりを続けた時、幕僚が思いがけずあっさりと〈治外法権〉を認めたことに驚く（驚くがもちろんそれはそぶりにも見せない）。そしてこの既得権を最大限に生かそうとする。それは大坂の常住地問題をめぐる交渉（アメリカ人の居住権）の際だが、幕府はぎりぎり、堺を常住地として認めた。そこから大阪に日帰りすればいいというのだが、ハリスは猛烈に抗議した。もし大坂に行ったアメリカ人が、突然重い病気になったとする。役人は杓子定規に大坂に宿泊しての治療を許さず、堺に戻れと言う。そこで病人は死んでしまうかもしれない。これは大問題になりかねないと恫喝する。

〈かかる非人道的行為に対して、アメリカ人は激昂し、その処置について大いに強硬な、そして出来るだけ誇張した申し立て（！）をするであろう。その陳述書は公使のもとへ（※わたしハリスのもとへ）、更にその写しは合衆国へ送られるであろう。このために、両国の間に一代紛争が巻き起こるかもしれない。〉（タウンゼント・ハリス『日本滞在記』、下148p）

なんという不自然な妄想的ケースであることか。何度チェックしてみても、あきれるばかりである。幕僚たちは長い交渉の間に彼に好意を持った者も多かつたらしく、日本はまだ外国貿易に関してはまったく未熟だから、是非その初歩から教えてくれと頼んだ者もいた（同上）。しかしハリスが教えたのは、うっかり同意してしまった治外法権の〈活用法〉のみだったことがわかる。幕僚はハリスの脅しにたいして、こうそっけなく答えた。大坂は京都に近い。許せば国内の争乱が起きることは目に見えている。まだ外国との戦争のほうがまだ、と（同上）。幕僚たちの思考法、もっとも大きな危惧がハリスたちではなく、それによって引き起こされる「攘夷」の激しさにあることがよく窺えるくんだりもある。

ともあれ、治外法権と、「自国民保護」のための干渉、軍事行動は、当時の列強が「非・文明国」に対する定番中の定番の権益拡大法であって、実際にこの交渉からそれほど遠くない1862年には生麦事件、そしてその賠償金をめぐっての薩英戦争（1863年）、下関砲撃（1863～64年）が起きることになる。その際興味深いことは、下関事件の賠償金をめぐって、やりてのイギリス公使、ハリー・パークスが提案した代替案だった（その部下の発案）。

〈氏は（ウィンチェスター外交官は）、イギリス政府に対し、この際下関賠償金の一部を放棄すれば、その代わりとして文書による天皇の条約批准の約束と、輸入税率を（※日本側の税率を）価格の五パーセントにまで一率に引き下げることが可能となるかもしれないとほのめかしたのである。〉（アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』、常175p）

これは非常にはっきりとした形で、権益拡大のメカニズムを示していると思う。つまり貿易があり、それを権益として保護するために軍艦が世界中に派遣されるというのが、「全盛期」の帝国主義の姿だったが、それがすでにここにひな型として示されているのである。「非人道的事件」も、ドルと税率に化け変われば、一件落着というわけだった。

300万ドルの賠償金の半額は幕府によって支払われた。これもまた京都に近い兵庫を開港するよりはという理由での受け入れである。残額は明治七年までかかって新政府が支払った。四カ国のうち（英、米、仏、蘭）アメリカのみが、明治半ばにこの賠償金を不当と認め、大部分を返済している。つまりパークスたちは、港も金も条約も、すべてを手に入れたわけだった。〈文明化〉とはまことに、ぼろい商売である。

こうした具体的な圧力、戦闘、賠償金、そして開港の連鎖は、すべてが〈うっかり〉から始まっていた。あのハリスもおどろいた治外法権の承認である。

〈わたしの次の要求は、日本で罪を犯したアメリカ人は、領事の審理をうけ、もし有罪であるならば、アメリカの法律によって罰すべしというのであった。これはなんらの意義もなく同意されたが、わたしは、愉快になるとともに、実は大いに驚いたのである。〉（ハリス、同上、中—178 p）

これは「鎖国の宿夢」（久米邦武）以外の何物でもなかった。幕僚はおよそ「外国交際」のイロハを知らないばかりか、アヘン戦争、そしてアロー号事件（ハリスがまさにこの交渉中に最大限に活用した「脅威」）で、実際に何が起きていたのか、どういう「法理」の偏頗性が働いていたのかを、まったく分かっていなかった。そのことがまさに如実に分かるのである。生麦事件がもし「領事裁判権」抜きだったとしたら、大名への無礼と、斬りつけた武士の両成敗（おそらく切腹）で、その日のうちに解決し、それを「あげつらう」ことはもうハリスにもパークスにもできなかつたに違いない。それがこうして連鎖に連鎖をうみ、定番の「植民地化圧力」へと化け変わっていったのだった。このメカニズムのすべてが、当時の通念である「文明」であること、このことを忘れては、開国維新史はすべておとぎ話になる。わたしは少なくともそう感じる。木戸や西郷は生麦事件と二度の列強艦隊との戦争で、「治外法権」の意味はもうはっきりと学んだ。しかし時すでに遅かったのである。

この現場での圧力とメカニズム、そして上で言ったことだが、「どうころんだかは誰にもわからない」という緊迫感を忘れると、木戸や西郷が具体的にどういう力と向き合っていたのかが感じられなくなる。したがって、そこから「列強の風」という説明方式が生まれるのだが、これも後知恵であり、おとぎ話の一種ではないかと思う。たとえば、その代表としてのノーマン。

〈1850年からアメリカ南北戦争と普仏戦争の勃発にいたるまでの国際情勢の特殊な複雑さ、ならびに日本における英仏の陰謀の行き詰まり——それにもっとも重要なことは、イギリスの中国への没頭——は、日本がその国内経済を老朽化させ、外からの通商的、

軍事的支配の危険にさらした封建制度の束縛を払いのけるために、是非とも必要だった時間的余裕を与えた。たまたまこのような国際的勢力均衡が存在したことを認めるならば、清国という疲れ果て延びきった肉体が、ヨーロッパ列強の植民地的食欲から日本を守る楯となったことは、多言を要しない。) (ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』第二章〈明治維新の背景〉、77 p f)

これはあらゆる意味で、黒船来航から維新までのメカニズム、その〈文明化〉の強力な圧力を矮小化してしまっていると思う。ペリーは、アヘン戦争と、ロシア外交を意識しつつ、先着争いを「最後の手段」(軍艦外交という名の)に頼って浦賀に現れたのであり、それは植民地化を強烈に意識した登場でもあった。

〈ペリー提督は、1853年7月8日に、日本の商業中心地たる江戸の湾に投錨した。1853年8月22日には、プチャーチン大将の率いるロシア艦隊が、長崎港に投錨した。.....もしペリー提督が不幸にも平和的企図に失敗して、日本と敵対することになれば、ロシアはその調停をするのではなく、ただちに日本の同盟者となり、日本に援助を与え、もしそれに成功したならば、適当な時期に日本全国を併呑しようとの意図を抱いていたのである。〉(ペリー、同上、1-170 p f)

もう一つ例をあげておこう。イギリス公使オールコックは、1859年に赴任したが、その赴任に先立って、日本とイギリスの国力をこう比較している。

〈十九世紀の人々は、「あきらかに高度の文明と、またはっきりと低次の文明が交錯しているばあい、劣勢民族の漸進的向上と、優勢民族の直接的な利益(!)とを融合させて、調和のうちに共存させることの困難さ」を熟知していると言われている。.....二つの文明の(※ヨーロッパと日本の)相対的な価値ならびに地位がどのようなものであろうとも、われわれの方が強力な民族である、つまり科学や戦争のありとあらゆる手段や器具の面で強力であるということは、否定しがたい。ヨーロッパの外交政策は、敵対行為に出ることをもって国家の一大災禍とみなし、これを避けるためにあらゆる努力を払ってきた。だが、それにもかかわらず、そのような敵対行為に出る危険性はたえず存在していた。そして、かりにわれわれが日本に対して、そのような行為に出たならば、日本を打ち負かして滅ぼすであろうことは、ほとんど疑う余地がない。〉(ラザフォード・オールコック『大君の都』〈序文〉、上、38 p f)

このあとオールコックは、こうして「滅ぼした」あとの日本が、ヨーロッパ、あるいはイギリスに同化できるだろうかという問いを立てる。どうやら難しい。「かつてスペイン人がメキシコの文明を吸収したのと同じように、われわれが日本人の文明を吸収することは期待できない。」また逆に、日本人がこれほど異なるヨーロッパ文明を吸収することもありえない。したがってわれわれは、「世界中のどの国民におとらぬほど勤勉で、親切で、

気だてのよい（！）三千万の国民の幸福と運命にかかわる、一つのときがたい問題に直面している。」（同上）

外交官らしいもったいぶった言い回しの背景にすけてみえる、自己満足的な「上から目線」は、すでに述べたように、この時代の〈文明化イデオロギー〉の最大の特徴でもある。つまりそれは分かり易く人種論的であり、また自画自賛的なのである。日本が滅びたあと、スペインが滅ぼしたメキシコになるのか、イギリスが滅ぼしたインドになるのか、それはまさに「ときがたい問題」だとわたしも思う。いずれにせよしかし、これが平均的な「列強」の本音であった。

和親条約も、通商条約も、まずアメリカが先鞭をつけ、あつという間に〈列強〉の登場となる。幕府はなすすべもなく、同じ不平等条約を締結させられていくのだが、ここでペリーたちは面白い発想をする。それは列強のパワーバランスを狙った、意図的な政策だったというのである。

（彼らは（※日本人は）イギリスの提督スターリングが、日本付近に出没するロシアの戦艦を探索しているということをも知った。そこで日本人は、日本をいずれかの国によって侵略されないようにする手段として、また自らが希望する厳正中立を保ちうるための手段として、一層進んであらゆる国々と条約を結ぼうとしたのである。）（同上、1-173 p）

これはもちろん事実に反する空想である。幕府にこうした〈統合計画〉を練る力はまったくなく、アメリカに屈したあとは、もはや〈騎虎の勢い〉でしかなかったからである。しかしペリーが、そしておそらくオールコックやプチャーチンたちも、こうした列強の角の突き合わせからくる、「手詰まり」は感じていたに違いない。しかしこれで「風」が生じたと考えるのは、あまりに単純である。列強は同じ条約の規格をもって、次々とその拡大を幕府に持ち出す。そしてあの治外法権のメカニズムが働くと、今度はしっかりと「連合艦隊」を組織して、賠償金と開港を手に入れたのだった。繰り返し言うが、どこにも「風」はない。

植民地化のメカニズムは、なによりも当時活躍した列強の公使たちのキャリアに反映されていた。たとえばロッシュはアルジェリアの植民地で成り上がった外交官であり（通訳あがり）、パークスはあのアロー号事件での「名声」によって、日本への配属が決まった、根っからの植民地化の猛者であった。パークスも通訳あがりの「セルフ・メイド・マン」で、外交官でありながら、フランス語はまったくしゃべれないという、当時としてはかなり例外的な存在だった。それだけ彼の「辣腕」に本国が期待していたということだろう。

日本にとっての幸運、小さな幸運があったとすれば、それは英仏の対立が、ちょうど幕府と雄藩（薩長）の対立に分配されたことだろう。そしてこの対立はまた、植民地官僚同士の間でもあったから、妥協の余地のない根深いものでもあった。

〈パークス公使とロッシュ公使はお互いに憎み合い、二人の女のように嫉妬しあっていたと言っても言いすぎではない。〉(A. B. ミットフォード『英国外交官の見た幕末維新』、18 p)

もちろん日本にとっての最大の幸運は、この列強からの圧力によって、迅速に〈大同団結〉の機運が高まり、それが志士たちによって直ちに実行に移されたことだった(薩土同盟、薩長同盟)。それは戊辰戦争における、列強の〈中立〉を勝ち取るまでに成熟していく。おそらく第二次征長の失敗から後は、この〈大同団結〉の流れはもはや止めようがなく、そして列強も、特にイギリスはこのことに気がついていった(下関戦争で、本国政府はすでに戦争に参加したパークスを譴責している)。この主体性が確立されてからは、偶発時に対する耐性もついていった。つまり「どちらにころんでも」、もう維新の流れは止めようがなかったということである。

しかしまたそれは、木戸や西郷が列強の圧力のメカニズム、その〈文明化〉イデオロギーの背景にある植民地化のメカニズムをすべて洞察していたということではない。予感はしていた。しかし洞察はまだだった。その部分での了解は、実はまだすれちがいのままだった(次節でそのことを検討する)。木戸たちがそのメカニズムのおおよそを理解しはじめたのは、あの米欧回覧を通じてであって、二度の列強との戦闘を通じてではなかったということ、そのことは強調しておきたい。つまり彼らの大同団結は、維新統一にむけてであって、すでに彼らの意識の中では列強との対峙は、副次的になっていたのである。それは「統一国家であれば、なんとかなる」という悲願のようなものと堅く結合された信念だった。そしてそれは基本的に正しかったのである。

この一種の加速度化(統一へ向けての加速度化)が、黒船開国の「内地における」メカニズムから発したものであって(開国から生じた金の流出、諸物価の高騰)、〈文明化〉イデオロギーとの接触ではないことに気をつけておきたい。つまりイデオロギーとしては、彼らは(志士も列強も)、すれ違っていたということであり、その「すりあわせ」は、日本の開化が始まってようやく意識されはじめるということである(再び米欧回覧の持つ中期としての意味)。

それはもちろん、〈文明化〉を構成するモメントである、〈革命〉、〈世界史〉、〈進化〉という、十九世紀的な集団イデオロギーが、まだ日本にはまったく知られていなかったからだった。蘭学における合理主義も、経世的献策はプロト・絶対主義的性格を示したものの(杉田玄白の富国強兵案はすでに検討した)、集団としての近代的イデオロギー獲得にまでは至っていない。そして蘭学が当時の日本ではもっとも先進的、近代的な定型であったことを考えれば、〈文明〉の幕末日本にとっての遠さも体感できると思う。

そこまでを現実の開国維新史の大筋として確認した上で、再び出発点の黒船に戻り、彼らの持ち来たった「文明化」のイデオロギー構造を検討しておくことにしよう。それは〈不平等条約〉という最大の桎梏へと外化されたイデオロギーであり、その底辺につねに植民地化の恫喝を伴うものであったことは既に観察した。しかしそれは裸の力の論理ではない。まさに〈使命感〉とでも言うべきものと複雑な化合を遂げていた。このことを忘れてしまうと、明治期に入って、またそれ以降の日本の〈外国交際〉の基調、日本側にはまずどう

しようもなかった基調を見逃すことになるので、その構造要因を精査しておく必要があるのである。

まず「文明化」の使命感だが、それはペリーの場合、「特異にして孤立した人民を文明国民と親しませようとするわれわれの企図」として表明されている（同上、2-194p）和親条約が締結されると、日本側はペリー一行を相撲興行によってもてなす。対してペリーはもちろん「文明の利器」を誇らしげに呈示した。

〈アメリカ人は誇りを以て、力士たちの野蛮な技量の誇示に対し、電信機と鉄道模型を披露した。日本側の委員たち（※条約締結の閣老たち）を招待したのである。それは日本の役人が行った嫌悪すべき見せ物に対し、より高度な文明的な呈示であり、まことに愉快的な対照をなすものであった。野蛮な動物的活力の見せ物の代わりに、半開の国民に対する科学と企業力の成果の勝利を啓示したのである。〉（ペリー、同上、3-230p）

日本側の役人たちは、模型の汽車に乗ってみせ、拍手をし、電信にもそれなりの関心を示したが、それはペリーたちが期待したような〈未開人の驚愕〉ではなかったことが、やや気落ちしたような記述から透けて見える。これはつまり、蘭学の蓄積、特に砲術、兵学方面での蓄積が進んでいたことの一つの成果だった。この落差（ペリーたちの期待と、日本側の反応の落差）が如実に窺えるのは、ペリーが最初に接触した役人である、浦賀奉行、香山栄左衛門（1821～1877）の場合である。紀州藩士の子として、江戸与力の養子となり、その縁で浦賀奉行を務めていた時にペリーの来航にあったわけだが、閣老たちの大あわてに比べて、彼の対応は非常に冷静で合理的であり、かつ外交のセンスにも優れていたことがペリーの記述を追うと分かる。そして最初の交渉の折、彼の〈蓄積〉が示されたのだった。

〈船室における小宴と談話が終わってから、栄左衛門とその通訳達は艦内の参観を勧められた。彼らは非常に懇懃にこの申し出を受け入れて甲板に出てくる。乗り組みの士官や水兵達は好奇心を抑えきれずに、ここかしこに群れ合っていたが、それを見ても日本人たちは片時たりとも沈着さを失うことなく、泰然自若として冷静な威厳ある態度を保っていた。彼らは艦内の各種の装備全体に対して理知的な興味を抱き、大砲を見ると、「ペーザン型ですか」と正確に指摘する。彼らは完備した驚嘆すべき技術と機構を始めて見たにもかかわらず、そうした場合に期待されるような驚愕の態度を微塵も示さなかったのである。蒸気機関は彼らにとって明らかに大きい興味の対象であったが、通訳たちの言葉を聞いていると、彼らが機関の原理についてまったく無知ではないことが分かった。〉（ペリー、同上、2-222p）

栄左衛門たちは参観が終わると、さりげなく自分たちの大小を謝礼として置いていく。その刀の鍛え上げ方には、今度はペリーたちが驚嘆したのだった。栄左衛門が、この場面以外にはほとんど記録も残さない、ごく標準的な奉行であっただけに、幕末の一般士人たちの文明適応力のようなものを如実に示す寸景であると思う。

同じようなことは、七年後の〈咸臨丸〉での訪米の際にも繰り返されている。大工場の見学をすると、説明に来たアメリカ人はきまって〈未開の驚愕〉を期待するのだが、福沢や勝はすでにその原理を日本で学んでいるので、実用の規模にはそれなりに感心したものの、本当の意味での〈文明のショック〉は受けないで帰国している。しかしその際に福沢が驚いたこと、つまり向こうの常識をわれわれはまったく知らないことがある。それも非常に多いということは、この栄左衛門たちの場合も同様だった。つまり文明のハードには驚かない、しかしソフト、そしてその背景にある全体的な〈イデオロギー〉に関して、幕末の日本人は全くの無知だった。

例えば通商交渉に際して、日本側の役人たちは〈通商〉、〈貿易〉といった基本概念にまったく初歩的な観念しか持っていなかった。したがって、交渉相手のハリスにその初歩を教えてくれとまで懇願したのだが、これはもちろん交渉の手段としては最悪に近かった。

〈接待委員（※条約交渉の接待役）たちは、また貿易について質問し、わたしの言う、役人の仲介なしに行われる貿易とはどういう意味のものかと質問した（※そういうものは、この時代、原理的に存在しないことに注意。密貿易は例外だが、密貿易はもちろん通商条約の対象とはなりえない）。これに関して、わたしは説明して、十分に彼らを納得させることに成功した（※そういうものがたしかにあると説明した、つまり真っ赤な嘘）。彼らは、われわれ日本人はこうした問題に全く疎く、それゆえ、赤子のようなものである。だから貴殿はわれわれに対して辛抱強くしなければならぬと述べた。そしてわたしの陳述のすべてに対して、全幅の信頼を置くと付言した。〉（ハリス、下—98 p）

貿易の「完全自由」についてのやりとりは、つまり関税率（日本側の輸入税率）をできるだけ下げるための工夫であり、ハリスの説明は虚言そのものである（国家の課税権利を否定するという意味で）。このやりとりを見て、なんだか奇妙に切なくなるのはわたしだけだろうか。この役人たちは、おそらく香山栄左衛門と同じ格の人々で、それなりに頭もあり、世間知もあり、決して無能な事無かれ主義の幕僚たちではない。蒸気機関を見ても、電信を見ても、驚かずにその仕組みに興味を持った人々である。それがまったく通商も貿易も知らず、それを知らないことを知り、自分たちが赤子同然だと悟る。そしてハリスにそう打ち明け、仕組みを教えてくれと懇願する。そこには真情と誠意そのものしかない。しかし後述するが、こうした役人はすべて、どうしてか、この大嘘をついたハリスから、〈病的な虚言癖のある面々〉とされてしまうのである。

ではハリス自身はどうか。

彼が一番力を注いだことの一つは、通貨の兌換率を決めることだった。それも金銀の正貨に関してである。幕府側は二十五パーセントの兌換料を要求した。それはドルを刻印した正価を日本の大判小判に鋳直す際の手数料が名目である。これはペリーも承諾した兌換率だったらしいのだが、ハリスはそれを5パーセントまで値切ろうとする。その論拠は、「文明国ならばこのくらいで改鋳するのが基本だ」というものだった。同じころ彼は珍しく下田に寄港したアメリカ商船から食糧を買い求め、代金を銀価で払おうとする。しかし

商船の船長は金貨でないといやだと拒否する。しかも日本の兌換率で求めたのである。ハリスは驚いてこう記す。

〈ハル氏の極めて高い値段に対し、銀貨でわたしは支払う。これに対して、彼はわたしに金で支払うことを望んだ。それは日本のこの地にあるわたしに、75パーセントの損失をもたらすものである。なぜなら日本人の銀に対する金の割合は、一に対して三ヶ七分の一に過ぎないからである。一に対する十六がアメリカの相場であるが、こうしたことはいかにニュー・イングランド人のやりそうなことである（※ハルはニュー・イングランド出身、ハリスはウェールズ系アメリカ人。）〉（ハリス、中208p）

金銀の兌換項目が解決すると、彼は「ペリーが払ったドルの何分の一で買い物ができるようにしてやった」と満足げに豪語するのだが、もちろんそこで暗黙に含意されていたのは、日本側にとっての最大の問題、金の流出だった。このメカニズムを造ったのはまさに彼だが、そして彼自身それが「強欲」であることを知っているのだが、もちろん、それに関しては一言も記録していない。「赤子同然」の交渉相手に、このメカニズムをまったく洩らさなかったのは言わずもがなである。

通商が始まると、あっという間に、一対四未満は、一対六にまで落ちる。それはもちろん莫大な金がすでに持ち出されたからだった。サトウたちが日本にやってきたのは、それから少したってからだが、彼らは洋銀で受けとった給料を直ちに日本の金と交換し、「それによって四十パーセント近い利ざやをかせぐことができた」と記録している（サトウ、同上）。「したがって、表向きは少なめの俸給でも、裕福な生活ができ、馬を飼ったり、シャンパンを飲んだり」できたのだった（同上）。

これはもちろん「文明的には」嘘ではないのだろう。たんにビジネスであり、黙秘であるにすぎない、そうハリスは自己正当化していたふしがある。つまりそれが、ソフトにおける優位性ということだった。

このハードとソフトの分岐は、開国維新の運動を理解する上で決定的に重要であると思う。何が重要かという点、ここでもまたすれ違いが起きていくからである。ペリーたちにとって、文明化とは、やはり分岐した過程だったことが、彼らの〈遠征記〉や〈滞在記〉を詳細に検討すると次第に浮かび上がってくる。ソフトとはつまり、和親条約や、通商条約がまず代表的な〈国際ルール〉としてのソフトなのだが、これに関しては、彼らはすぐ交渉相手である日本側の士人閣老の無知を知る。無知を知って、それを最大限活用する。もちろん聞かれれば答えるのだが、聞かれないと答えない（治外法権の意味、関税の意義など）。そしてありあわせの嘘もよくつく。自分の言うことを聞かないとすぐにでもアメリカの軍艦が押し寄せると恫喝したハリスの場合など（彼はもちろんそこまでの「全権」はまったく持っていなかったどころか、大統領とはかなり険悪な間柄だった）。

それに対して、文明的アイテム、特に軍事面でのハード誇示の効果がそれほどないことは、彼らも学習し始めた。たとえばペリーから数年後、将軍謁見のために江戸に向かうハリスは、当然、贈り物を持参するのだが、そこにはすでに「文明の誇示」のモチーフはほとんど失われている。

〈1857年10月17日 わたしは江戸の将軍と閣老への贈り物として喜ばれそうなものを、わたしの所持品の中からいろいろと選んでいるところだ。

それらの品々は、シャンペン、シェリー酒、ワイン、甘露酒、チェリー・ブランデー、挿絵が沢山入った博物学の本、望遠鏡、晴雨計、美しいアストラル・ランプ、華麗なカットグラスの壺、砂糖煮の果物などである。〉(ハリス、同上、中―316p)

これは出島のオランダ商館長たちの謁見式に戻ったような趣きがある。嗜好品の贈答に過ぎず、少なくとも先進文明の誇示ではまったくくない。しかしハリスの場合ももちろん、〈文明の使徒〉の自覚は非常に強かった。たとえばこういう風に日本滞在を総括してみせる。

〈1857年8月19日(※日本到着の前日) わたしは、日本に駐在すべき文明国からの最初の公認された代理人となるであろう。このことは、わたしの生涯に一つの画期を刻むとともに、日本における諸々の事物の新たな秩序の発端となるであろう。〉(ハリス、同上、上、エピグラム)

ハリスがやったことは、一言で言えば、〈軍艦なしの軍艦外交〉であった。彼が期待していたアメリカ海軍は、当時、アロー号事件と天津条約の処置に追われて、中国に釘付けだった。それどころか本国からの音信も途絶えて、ほとんど一年以上、孤独の生活を強いられる。彼は軍艦にとにかく来てほしかった。それが条約交渉の決め手だということを知悉していたからである。

〈一八五七年四月二十五日 アームストロング提督がやってこないのはどうしたわけか、わたしにはわからない。わたしがもし一隻の軍艦を当所に有するならば、例の二つの問題(※通貨問題と領事権)に関するわたしの要求に対して、急速な回答を期待しよう。しかし軍艦がやってこない限り、問題が解決を見ないことは確実に思える。〉(ハリス、同上、中232p)

〈一八五七年五月二日 一隻の軍艦がないことは、また日本人に対するわたしの威力を弱めがちである。日本人はいままで、恐怖なしにはなんらの譲歩をもしていない。我々の将来の交渉のいかなる改善も、ただ我々に力の示威があつてこそ行われるのである。〉(同上、中243p)

待てども軍艦は来ない。江戸での交渉は難航する。業を煮やした彼は、ついに空砲を見舞うことにした。決裂したあとには、必ず戦争だと脅したのである。

〈一八五八年一月九日 わたしは一つの危機を引き起こしてやろうと決意した。……わたしに対する日本人の態度は、全権委員が艦隊を背景とし、日本人に対して議論の代わり

に砲弾を見舞うことなしには、談判なるものが決して彼らとの間に行い得ないことを示すものだと言って、話を打ち切った。わたしは最後の言葉として、もしなんらかの手がうたれなければ、わたしは下田に帰るであろうと言った。……

これはわたしとしては明らかに大胆な措置ではあった。しかしこの国民についてのわたしの知識からして、この所為によって交渉をぶちこわしにする危険を冒してはいないことをわたしは知っていた。わたした屈服し、黙従すればするほど、彼らはわたしを欺くであろうが、大胆な態度をとり、威嚇的な口調を示せば、彼らはただちに従うだろう。そうわたしは思ったのである。〉(同上)

このくだりは、日本側の史料も残っていて、そこでのハリスの言葉はさらに激越である。

〈余は断然旗幟を撤して帰国せんのみ。其平和の使臣に代つて来たらんものは、必ず幾隊の軍艦ならん。日本の迷夢を覚醒せんものは、唯砲烟爆雨の外はあらず〉(堀田正睦〈幕末外国関係文書之十八〉)

結局小さめの砲艦一隻が偶然下田に寄港しただけで、望んだ艦隊は来なかった。それで彼は代役を使うことにする。アロー号事件(1856年)と天津条約(1858年)の「恐ろしい結果」使うことにしたのである。通商条約を早めに結ばないと、きっと英仏の艦隊が押し寄せて清国の二の舞になると「忠告」した。すでに実権を握っていた井伊大老は、右腕の間部老中(詮勝、1804～1884)を朝廷に使わし、年末に勅許を得ることに成功した。それに先立ち、間部はこう述べている。

〈昨月十七日、下田表え渡来の亜船(※アメリカ船)え、彼国の使者ハルリス^{ならびに}并通弁の者乗船、神奈川え入津いたし、書翰差出、今度英・仏の軍艦清国の戦に勝、其勢に乗じ、近々弥御国え渡来致し、強訴の企之有る由注進に及び候。〉(〈間部詮勝申上書〉、安政五年十月二十四日、『幕末政治論集』所収、107p)

ハリスはしかし、交渉中の条約さえ締結されれば、そういうことも無くなるはずだと太鼓判を押した。間部たちはもし清国のようになれば、「憂患今日に十倍致し、汚辱を後代に伝え候共、相雪^{あいすぎ}候術之無く」、この忠告に従うしかなかったと述べる(同上)。

ハリスがある程度まで本気だったこと、つまり植民地戦争モードだったことをよく示すのは、彼が江戸入府の際、江戸城の構えを見てその攻略法を空想してみることによく現れている。

〈門(※江戸城の)の通路に小さい建物があって、その正面に半ダースばかりの槍がたてかけている。三名乃至五名の武士がむしろの上に座っていた。大きな門扉には、重そうな蝶番がついており、頭の大きな蹄釘が門扉をなかば蔽うほど打ってあるので、一見頑丈そうだ。しかし少し注意して見れば、それはみな見せかけで、実質的なものではないことが分かる。扉は松材か、糸杉材で造られており、その蝶番は石のはめこみに埋める代わり

に、松材の柱に打ち付けてあるだけである。頭の大きな蹄釘は形だけの見せかけにすぎず、門にそれらを留めておくために、下の方に小さな鋸が打ってある。六ポンドほどの曲射砲一門に火薬をつめただけで、これらの門のすべてを破壊できるだろう。) (ハリス、同上、下64p)

これはまったくの索敵スパイモードでの観察である。文官外交官も実際に植民地においては敵対行為の際の参謀役を果たすことが普通であったから (広州領事のパークスの例など)、ハリスは特に悪意をこめて江戸城を見ているわけではないのだが、むしろその常態がはげしく問題であったことはたしかだ。この文書が妙なことで日本人にも知られていたら、攘夷のほむらにそれこそ猛烈な油を注いだであろうことは想像に難くない。

上述したことを再度繰り返すが、ここでは列強の対立が一時の「風」を生んでいたのではない。逆にその連携によって、圧力は二倍、三倍になっていたのである。つまり風ではなく、嵐のただ中に日本はあり、それを間部たちも痛感していたということ。このことを忘れては、開国維新史は絵に描いたきれいな事になってしまう。

アロー号事件と言えば、最初にそのきっかけをつくったのは、外ならぬパークスである。当時広州領事だった彼は、イギリス船籍 (かどうかも定かでなかったようだが) アロー号に対する清国官僚の臨検 (海賊容疑) および船員の逮捕を「違法」として抗議したのだった。これが清国側の強硬姿勢を引き起こし、結局戦争へとつながっていく。つまりこれも治外法権の一種であるから、そこには生麦事件をさらに大きくしたような植民地法理が働いていたことが如実に観察される。日本は生麦事件を一度だけ体験したが、パークスはもう中国で体験済だったと言ってもよい。これが当時の「外国交際」の現実だった。これも忘れないようにしよう。

アロー号事件が、日米通商条約の前提だったことは、横浜の外国人居留者にも常識だったらしい。当時日本でリベラルな新聞を始めようとしていたジョン・ブラック (1826～1880) はこうまとめている。

〈天津条約をもたらした英仏軍の成功は、ハリスが条約を結ぶのに、事実助けになった。彼は中国で横暴なやり方をしているこの二国の使節が、同じ行動を日本でも必ず取ると主張して、幕府の恐怖をあおりたてた。こうして、二つの強国と日本との間における調停者として、必要ならば、出来るだけの尽力はしようと約束して、それまで執拗に求めていたものを手に入れたのである。もちろんもう調停の必要はなくなっていた。〉 (ジョン・ブラック『ヤング・ジャパン』、1-11p)

わたしの世代は、前世紀末の苛烈な貿易摩擦を体験した世代で、パークスやハリスにどこか似た人々が、過激な論陣を張るのをいつも新聞やテレビで見てうんざりしていた。その時にペリーと「たった四杯」を連想したわけではないのだが、こちら側に大きな圧力がかかると、「また黒船だ」という皮肉ともあきらめともつかない言葉が聞かれたのもたしかである。さいわいしかし、このジャルゴンの実体的な背景、つまり大きな「文明差」はずでなくなっていた。にもかかわらずまた、おたがいに一方的に相手に非があると思ひ

続けたことの心理的背景には、やはり基底部で生き続ける「落差」の問題が介在していたとを感じる。つまり集団の「文明」に対する対峙の仕方、その非対称性と言ってもよい。もしあの泥沼合戦の背景に、実体的な文明落差があったらどうだっただろうか。これがしかし開国維新の現実だったのだとわたしは思う。だからこそまた、木戸や西郷の苦勞が偲ばれるのである。

一言で言えば、〈文明の使者〉たちが乗ってきたのは蒸気船であり、蒸気船の最新式軍艦だった。それが目に見える、文明落差だったのである。ここで再び、ハードはソフトと合体する。ハリスは江戸での交渉の初期に、まず国際貿易の互惠性を強調した。

〈1857年12月12日 わたしは、蒸気の活用によって、世界の情勢が一変したことを語った。日本は鎖国政策を放棄せざるをえないだろう。日本の国民に、その器用さと勤勉さを行使することを赦しさえするならば、日本は遠からずして偉大な、強力な国家となるであろう。〉(ハリス、同上、下—87p)

長期的に言えば、このハリスの予言は正しかったわけだが、彼が本当にこうした美辞麗句を信じていたかどうかは定かではない。当時の日本からの輸出品は茶と生糸であり、家内副業の綿織物は、インドと同じく開港初期に壊滅的な打撃を蒙った。それに加えて金の流出であり、どう見ても開国による実利は長い間極小に留まった。

ハリスはすぐにまた、軍艦外交に転じる。今回も〈列強〉のそれを用いた。

〈諸外国は競って強力な艦隊を日本に派遣し、開国を要求するだろう。日本は屈服するか、そうでなければ戦争の悲惨に巻き込まれざるをえない。戦争が起きないにしても、絶えず外国の大艦隊の来航に脅かされるに違いない。だからこそ、なんらかの譲歩をするのなら、適当な時期に行う必要がある。云々〉(同上)

交渉が長引くにつれ、互惠的なリップサービスはまったく影をひそめ、ひたすら軍艦の脅威で押し切った。これが少なくとも彼の滞在記から浮かび上がる、通商交渉の実態である。

まとめてみよう。

蒸気船が世界を変えた。これは正しい。「黒船」が日本を変えた。これも正しい。その変え方は、まず国際貿易が「ペイし始めた」ことだった。商船は大型化し、速度も増していく。そしてそのすぐあとに、まさに護送船団のように、「提督」たちの率いる蒸気船軍艦の艦隊が現れた。列強はこぞって植民地、半植民地を開拓していく。すると貿易からの利潤はうなぎ登りになった。逆側に被植民地の長い停滞、自律的近代化の阻害が生じる。インド、中国がその最大の被害者であり、それが「商社」(東および西インド会社)から始まったのは偶然ではない。蒸気船の登場以前に、「文明」は邁進していた。国際貿易に乗った、「世界資本」として。これがちょうどヘーゲルからダーウィンの時代の状況である。ある意味でそれは、マニュファクチュアと工場制生産の関係にも似ている。つまり社

会的分業とイデオロギーが用意され、資本が十分に蓄積されたとき、最後のピースとして「発明」が起こり、全体はおそろしい速度で進行しはじめる。

では「蒸気船軍艦」に乗って世界を周航し始めた〈文明化イデオロギー〉は、その周航の体験によって、何か新しい構造体、すでに見た、革命、世界史、進化論のパラダイムを越えるような、あるいはそれに付加されるような、〈本来の近代文明〉のようなものを発見したのだろうか。その発見がまた黒船来航とどこかで重合、融合しているのだろうか。

概観してみると、新しい要素はほとんど加わっていないことがわかる。しかし一つだけ、新しいとも言える化合のようなものが起きた。それは他者性と〈陰謀〉の融合である。他者性というのは、つまり文明ヨーロッパにとっては、非・ヨーロッパであり、アフリカ、インド、東洋、そして奴隷たちのすべてが、敗者と劣者とされた者たちのすべてが、そこにはごたまぜに放り込まれていた（まさにゴミ箱のように）。〈陰謀〉論が、フランス革命以来、ヨーロッパ的心性の基底部を形成していったこともすでに見た。

ではその二つが重合するとどうなるか、それは〈つねに陰謀を廻らす他者〉となる。そしてそれは時には、〈陰謀を廻らす不屈きな仲間〉へと拡張される。つまりパークスがロッシュを嫌い、ロッシュがパークスを嫌った時、彼らは自分ではなく、相手が陰謀を廻らしていると常に思いこんでいた（実際にほとんどノイローゼ状態だったことが史料から透けて見える）。その場合、自分はずねに文明人であり、相手が陰謀をめぐらすから、やむをえず、自分も「対抗手段」をとる。こう彼らは考えた。これはほとんど政治ネタのボードビルだが、現実がボードビルに近かったのが、このころの「列強」の国際外交でもあった（漱石ならば、「品性が著しく低い」と総括しただろう）。そして幕末の日本は確実にそれに巻き込まれた。

それがわかるのは、彼らが異常に固執する、「交渉の相手方（すなわち日本の役人）はすべて嘘つきだ」という、確固たる信念である。たとえばペリー。

〈われわれは、高位の日本の役人及び官庁職員が、外国人との協商及び交際に対してしばしば恥知らずにも示した、深く謀んだ虚偽と二枚舌とに言及するだろう。〉（ペリー、同上、1-59p）

ペリーは続いて、これは国民一般のことを言っているのではない、「彼らははなはだ慧眼にして快活な人民である」と断る。しかし為政者は違う。交渉相手は違う。すべて二枚舌で嘘つきであり、それは彼らが「密偵制度」に縛られているからだ、と理由を述べる。この密偵制度は、幕藩体制の現実ではあったが、濃淡のばらつきが非常に大きな制度でもあった。それをペリーは一般化し、例えば右大臣左大臣、南町奉行北町奉行という、古来から日本に見られる一種の相互チェック（その意味でのバランス・オブ・パワー）も「密偵制度」に含めてしまう。日本は「密偵の政府」であると彼は断言する。

これはかなり極端なモデルだが、逆に「文明の使徒」たちの自己意識を照らし出していると思う。つまり無垢の民衆と、狡智の為政者の二分、これが一つ。それは民衆を〈革命〉の側に、為政者を〈アンシャン・レジーム〉の側に寄せることになる。したがってここから第二のモメントが顕在化する。それは東洋の制度そのものを、悪意と狡智のかたまりの

ように見る視点だった。自分たちが先導する「文明」が無垢の民衆の役に立つなら、自分たちは「文明における革命家」の地位を得る……かもしれない。そういうことも、漠然とだが含意されている。それゆえの使命感である。

同じ猜疑心と二分化、東洋制度の全体的な嫌悪は、ハリスにおいてもはっきりと繰り返されている。

〈なんとかして真実が回避されうる限り、日本人はけっして真実を語りはしない。そうわたしは考える。率直にほんとうの事を答えればいい時でも、日本人は虚偽を述べることを好む。〉(ハリス、同上、中239p)

情報提供を求めると、嫌々回答があるが、その情報はあまりに少なかった。これがまたハリスの猜疑心を刺激する。

〈合衆国の特許庁から綿に関する種々の情報の提供を依頼する回状を受けとった。……それらをわたしは翻訳して日本人に渡し、必要な情報を提供するように要請した。今日その返書を受けとる。それは、日本人の奸智と狡猾と虚偽の立派な見本である。彼らの大きな目的は、自分の国について知られることを、できるだけ少なくしようとするところにあるらしい。つまり、あらゆる詐欺、瞞着、虚言、そして暴力さえもが彼らの目には正当なのである。この国が、世界中でもっとも情報の入手の困難な国であるのは事実である。統計というものがないし、産業関係の問題をあつかった出版物も一つもない。〉(ハリス、同上、中250p)

統計はそもそもないのだ！ 隠しているのではない！ ハリスは明白な自己撞着を犯していてそれに気がついていない。いわゆる〈坊主憎けりや袈裟までも〉というのは、こういう状態を言うのだろう。特許という考え方すらない国に、綿の特許（おそらく綿織物の輸出を見越しての）を尋ねようとする事自体、公使にあるまじき無知蒙昧な飛躍ではあった。

〈日本人の嘘は底無しである。わたしはいま、〈大君の三人の兄弟〉は、たんに名義上の兄弟にすぎないことを知った。彼らは大君の親族ではあるが、別家の生まれで、われわれが知るような戸籍上の兄弟ではない。〉(ハリス、同上、下182p)

これも坊主と袈裟の早とちりである。御三家はたしかに家康の息子たちから生まれた家柄だった（尾張徳川家は家康九男、紀州徳川家は家康十男、水戸徳川家は家康十一男）。だから御三家の将軍との近さを、おそらく幕僚の誰かが「いまだに兄弟同然だ」くらいに説明したのだろう。それをハリスが「われわれの戸籍の観念」で調べてみると、とてもそうではない。したがって「底無しの嘘」だと判断する。むしろ、これほど初歩的な情報の整理もできずに日本に来たこと、そして一年以上をすでに過ごしていたことに驚かされる。

そのハリスも、狡智の為政者と〈素朴な民衆〉をきちんと区別している。それは彼が江戸入りした時に集まった見物客を見た時だった。

〈見物人の数が増してきた。彼らはみなよく太り、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ富者も貧者もない。これがおそらく人民の本当の幸福の姿というものだろう。わたしは時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、果たしてこの人々の普遍的な幸福を増進することになるのかどうか、疑わしくなる。わたしは質素と正直の（！）黄金時代を、いずれの国におけるよりも、より多く、日本において見いだす。生命と財産の安全、人々の全般的質素と満足は、現在の日本の顕著な姿であるように思われる。（ハリス、同上、下26 p）

ハリス個人は、動植物を愛する篤実なクリスチャンだった。その本音のようなもの、文明化の弊害を見続けた人間のコンセンサスから発する溜息のようなものが、この寸景には感じられる。しかしもちろん彼は根っからの豪腕外交官であり、〈相手〉はあくまで、狡猾な、二枚舌の幕府の高官たちであった。

ではこういう狡猾きわまりない相手に向こうにおいて、はたしてどのような「交渉」が可能になるのか。それは二つしかないと思う。単純な恫喝か、あるいはより狡智に陰謀を廻らすかのどちらかである。たしかにこの粗暴で陰險な方式が、「列強」がヨーロッパで繰り広げていた「文明的交渉」の内実であることに気づけば（ビスマルクはそれをさらに活用して、勢力の均衡を実現するという離れ業を演じた）、ここでペリーは、自他の区別にヨーロッパ台非・ヨーロッパではなく、むしろヨーロッパ列強の論理を持ち込んでいることに気づかされ、その面である種の驚きをも感じるのである。

日本を列強のルーティンに巻き込んだ、その理由は二つあると思う。一つは長く擦り込まれてきた、〈黄金の東洋で商売をすることの難しさ〉である。これはケンペルやシーボルトの見た前近代の日本の姿であった。そこにも彼らの思いこみが重合していることは今は問うまい。ともかく莫大な富があり、それに近づくことが非常に困難で、そのためには大切な自尊心も置き去りにしないとイケない。それがたとえばこの時代まで珍重されたケンペルの描く〈交渉〉の実態である。もう一つは、〈成功の短さ〉とでも言えばよいだろうか。最初の商用蒸気船からペリーまで、五十年と経っていない。このことは彼ら自身が一番良く知っていた。格差が大きい内に、それを商売に活かそうとするのは、〈ビジネス〉の鉄則なのだろう。しかしかれらの場合、それを〈軍艦つきのビジネス〉に拡大した。この成功の大きさと、そのごく最近の履歴は、それがあるいは非常に短い期間の〈濡れ手に粟〉かもしれないという予感も生む。したがって彼らは非常に性急に成功を求める。〈交渉相手〉を本当に見る暇がないのも、そのためである。あるいは……

あるいは、最初から見ようとしないところに、〈文明イデオロギー〉の最大の問題、そのエゴセントリックな偏頗さがあるのかもしれない。他者としての日本民衆の理解ということでは、この時期の最大値はおそらくハリスの上の感慨、江戸の民衆の〈幸福〉を見た時の感慨だろう。逆側にたとえば、オールコックの次のような観察がある。

〈長崎にいたころ、あるオランダ人が自分の体験としてわたしに話してくれたのだが、彼ら日本人は単純な子供じみた信念でもって、虚構を現実だと信じるのである。このオランダ人が雇っていた一人の若い女が、ある日ひじょうな悲しみと不安の色を店、胸も張り裂けんばかりの顔をして泣きながら帰ってきた。「どうしたんだい花、なにごとが起きたんだい？」こう聞くと、花はすすり泣きながら、「とても悲しゅうございます。あの方が殺されてしまったんです」と言う。〉(オールコック、同上、中396p)

オランダ人の主人が驚いてどこだ、誰が殺されたんだと聞くと、花は「ほんとうに殺されたんです」と答えて泣く。どうやら芝居を見に行った帰りらしい。しかし本当に悲しんでいる。それでオランダ人も、その話を聞いたオールコックも、「日本人は子供じみた信念をもって、虚構を現実だと信じるのである」と結論する。まことに……人は見たいものを見たいところに「発見」するようにできているものである。シェイクスピアの悲劇に感動して泣いているロンドンの紳士淑女を見れば、それは「芸術への感動」だと即座に了解される、これが彼らの自他の弁別であった。

これは馬鹿馬鹿しいくらいに極端な例だが、それはそれとして、やはりヘーゲルの「世界史」につながる現象であることを忘れないようにしたい。そこでは東洋も、オリエントの全体も、「眠れる夢の国」であると定義された。だからこそこの芝居好きの花さんもまた、ヘーゲルには立派な「証拠」と見えるにちがいない。オランダ人もオールコックも、その意味で「勝手に妄想を持っている」わけではないということ。そしてそれがまさに問題であるということを指摘しておかねばならない。

〈文明イデオロギー〉を総体として見れば、それは他者集団との〈交渉〉、つまりなぜかいつも自分のためになる折衝の能力をおそろしく高め、〈交流〉、つまり本来的に人間的な互恵的相互是認の能力をおそろしく低める、そういう心性の偏頗であったと結論できるだろう。さいわいにして、ここまで極端な時代はやがて終わり、明治が進むと、日本文化を真に理解しようとする人々が登場する。ベルツやリースやハーンやモースの時代が幕を開けると、われわれもなんだかほっとすることになる(花さんもほっとしただろう)。

しかしその前にまだ、この極端な人々と向き合った幕末維新の心性を精査してみないといけない。大きな食い違い、すれ違いはほとんど〈理の当然〉だったことが予想される。ではそれはどういう〈理〉を内包していたのか、それが次の探索の課題である。

(近代本論第十四回テキスト終わり)